

FGO×ウルトラマン 短編まとめ

メンツコアラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

思い付いたFGO×ウルトラマンのネタを纏めています。

書かせて欲しい。連載して欲しいという声がありましたら、活動報告にアンケートがございますのでコメントをお願いします。

立夏が変身したウルトラマン

ウルトラマンガイア

ウルトラマンコスモス

サーヴァントとして登場

クレナイ ガイ（ウルトラマンオーブ）

目次

一部第七章 絶対魔獣戦線バビロニア	
第2節IF 通りすがりの風来坊	1
第15節 if 君だけを護りたい	6
二部 Lostbelt No. 1 永久凍土帝国アナスタシア	
第21節 IF 大地の赤き巨人	9
第21節IF 慈愛の戦士	16
幕間	
タイタス幕間くお願いタイタス！く	21

一部第七章 絶対魔獣戦線バビロニア 第2節I F 通りすがりの風来坊

貴方の心に悪はあるか？ 邪悪な心を持っているか？ もし、持っているのであれば、すぐに耳を塞ぐ必要があるかもしれない。あの男の奏でるメロデーは、邪悪が忌み嫌うものなのだから……



2015年、人類史は消滅した。

原因は歴史上に現れた七つの『特異点』。

唯一消滅せずに残った人理継続保証機関『フェニス・カルデア』の生き残りであり、人類史最後のマスターである藤丸 立香はデミサーヴァントであるマシユ・キリエライトと『ロマニ・アーキマン』を初めとするカルデアの生き残った職員達と共に未来を取り戻す為の闘いを挑むことになった。

そして、時は流れ、遂に最後の特異点へ挑むことになる。そこは神代がまだ生きていた時代、古代メソポタミアの土地だ。

準備を終え、立香とマシユはロマニ達のサポートの元、古代メソポタミアの地、ウルクへとレイシフトを開始するが、到着した場所に人は居らず、代わりに出迎えたのは魔獣の群れ。絶体絶命のピンチに一人の青年が彼らを助ける。青年は自らを『エルキドゥ』と名乗り、立香達をウルクまで案内すると申し出た。

彼の案内の途中、彼らはその時代の現状を目の当たりにする。

千は軽く越える魔獣の群れ。そして、その行く手を阻むように聳え立つ、終わりの見えない城壁。エルキドゥ曰く、その壁こそ人類最後

の砦『絶対魔獣戦線 バビロニア』と呼ばれているらしい。

立香達はその光景に驚きながらも、エルキドウの案内でウルクに向かう。だが……

「……先輩、変だと思いませんか？」

場所は杉の森。その中を歩く途中、先導するエルキドウに聞こえないようマシユが立香に話しかける。

「……ウルクとは逆方向だ……」

「……はい。ウルクから遠ざかる一方です」

「どうしました？ 何か気になることでも？」

こそこそと話す立香達にエルキドウは足を止めるが、立香は問題ないと答え、暫く様子を見ることにした。

「この先に波止場があります。そこに舟がありますので、後は川を下るだけ。もう少しの辛抱ですので頑張ってください」

優しく微笑むエルキドウだが、立香とマシユは今までの経験から、その笑顔に隠されたどす黒い何かを感じとり、すぐさま臨戦態勢を整えようとする。しかし、突如彼らの耳に音楽が聞こえた。

—————♪—————

ハーモニカだろうか？ 初めて聴く音色に困惑する立香達だが、その旋律を聴くと何故か心が安らいでいく。不思議に思っていたその時、見ればエルキドウが頭を抱え、苦しんでいるではないか。

「がッ……ぐう………ッ」

音はどんどん近づき、やがて森の奥から一人の男が姿を現した。革ジャンを羽織り、レザーハットを被る男の姿は間違いなくウルクの民でない事を示している。

男は先程まで演奏していたハーモニカのような物から口を離し、立香達に声をかける。

「お前ら、何処に行くつもりだ？」

「あ、貴方は……？」

「俺か？俺はクレナイ　ガイ。通りすがりの風来坊さ」

男……ガイは立香たちとエルキドウの間に立ち、エルキドウを睨み付ける。

「お前……何者だ？」

「何者、というと？」

「あの、エルキドウさんがどうかされたのですか？」

「こいつがエルキドウ？……なるほどな。お前ら、いいことを教えてやる。今、ウルクで指揮をしているギルガメツシュは不死の霊草探索を終えている」

「——ッ！」

ガイの言葉に、立香とマシユはすぐさま臨戦態勢を整える。何せ、ギルガメツシュが霊草を探しに行つたのはエルキドウが死んでからの話なのだから。

「ふ——ふふふふふッ！　まあ、すぐにバレなきや嘘だよねッ！　こんにちは、カルデアの諸君。実に惜しかった。キミたちは人類の希望という奴だろう？　失敗作の人類の中でもトップクラスのキミたちをこの先の女神に献上したら、どんな生地獄を見れたものかッ！」

先程までの優しい笑みから豹変し、人を嘲笑うようなエルキドウ……いや。エルキドウを名乗る偽者に立香たちはより警戒心を増す。

「おっと。逃げるつもりかい？　先の戦いで分かっているだろう？」

圧倒的力の差を知っているキミたちが逃げ切れる可能性なんて微塵も「ある」——なに？

「あるって、言ったんだよ。コイツらは俺が守る」

「……何処の誰かは知らないけど、随分と傲慢だね」

「傲慢かどうか……戦って確認しなッ！」

ガイは自分の腰に手を回し、そこに下げていたリング状のアイテム『オーブリング』を自分の目の前で翳す。するとオーブリングから光が溢れ、彼の体は紫色の銀河のような空間『インナースペース』へ移

動する。

彼は腰にさげたケースから赤と銀の選手が描かれたカードを取り出し、リングに通す。

「ウルトラマンさんッ！」

【ウルトラマン！】『へアッ！』

カードが粒子となり、粒子は彼の隣で形を作り、『伝説の光の巨人ウルトラマン』となる。

次にガイが取り出したのは赤、銀、紫の体を持つ戦士のカード。

「ティガさんッ！」

【ウルトラマンティガ！】『ティアッ！』

先程と同様。粒子となったカードは描かれていた戦士『古代の巨人ウルトラマンティガ』となった。

「光の力、お借りしますッ！」

オーブリングを天に掲げ、トリガーを引けば、オーブリングから光が溢れ、ウルトラマンとティガの姿がガイと重なり、彼はその姿を変えた。

【ウルトラマンオーブ！】

スペシウムゼペリオン！

それは突然の出来事だった。ガイが奇妙なリングを前に翳したかと思えば、彼の体が光に包まれ、波紋が広がる音と共にその姿を変えた。

銀、赤、黒、紫に染められた体。胸から背中にかけて広がるプロテクター。胸には青空のように蒼いリング状のクリスタル。

『な、なんだッ!? この魔力量はッ!?』

始めてみるデータに驚くロマニの声が腕の通信機から聞こえる。

しかし、立香の耳には届いていない。それほどまでに、今のガイの姿に見いつていたのだ。

「貴様……何者だッ！」

エルキドウの偽者は姿を変えたガイに問いかける。それに対し、ガイはこう答えるのだった。

「俺の名はオーブツ！ ウルトラマンオーブツ！」

闇を照らして、悪を討つツ!!」

第15節 if 君だけを護りたい

「あなたは何故、そんなに頑張るんですか？」

「急にどうしたんだ？」

「あなたがウルトラマンと言っても限界があるはずですよ。なのに何故……」

「うーん……限界を超えるため、か？ 限界を超えた時、初めて掴み取れるものがある。それを掴み取るため……かな？」

「……私にはよく分かりません」

「焦ることないぜアナ その内分かるときがくるさ」

そう言っつて、男は……アスカ・シンはアナの頭を撫でるのだった。



絶対魔獣戦線バビロニア。人類史最後の特異点で立香たちは『金星の女神 イシユタル』、『花の魔術師 マーリン』、『アナ』、『風の風来坊 クレナイ・ガイ』と共に三女神同盟の石柱『ゴルゴーン』討伐のため、彼女が待ち受ける鮮血神殿に乗り込んだ。

対峙するゴルゴーン。彼女の後ろには壁にとらわれた巨大な石像が一つ。

突撃するアナ。皆が彼女をサポートし、石像に辿り着いた彼女は離さず持つていたあの石を取り出した。

「来ましたよ、アスカ……いつまで眠っているんですか……？」

少女の頬に一筋の涙が流れ、それが石像に落ちる。

「町の皆も……ギルガメツシユ王も……あなたが帰ってくるのを待ってるッ……！」

——目覚めてッ！

高く振り上げた石：否。『リーフラッシュャー』を石像の胸に叩きつける。次の瞬間、アナの祈りに答えるかのように、リーフラッシュャーから石像へ、淡い光が宿る。

「させるかあああッ!!!」

石像を目覚めさせると、ゴルゴーンが全力で石化の魔眼を使う。襲い掛かる石化光線。立香たちは動けず、オーブもゴルゴーンとの戦闘で体力を失っている。

血の如き、赤黒い光がアナを包み込む。

しかし――

『待ってくれッ！ 彼女はまだ生きてるッ！ しかもこれは新たな魔力反応ッ！ ゴルゴーンなんて比べ物にならないッ！ 間違いなッ！ この波形パターンは

――ウルトラマンだッ！』

次の瞬間、石化光線を押し返し、目映い光がゴルゴーンに命中する。光の原点、石像があつた場所から、アナを手に乗せ、彼が降り立つ。銀、蒼、紅に染まった体。胸から肩にかけて走る黄金のプロテクター。胸のカラータイマーの輝きは大空の如し。

彼こそが光の超人、ウルトラマンダイナである。

「アスカ：遅いですよ」

「わりの。でも、もう大丈夫だッ！」

「アスカさんッ！」

「ガイッ！ まだいけるかッ!？」

「――はいッ！」

ガイの言葉を受け、立ち上がるオーブ。

そんな彼らに、ゴルゴーンは苛立ち、怒りの声で問いかける。

「何故だッ！ 何故、貴様らは邪魔をするッ！ 何故、人間のような下等でつまらない生き物に寄り添うッ！」

「別に理由なんかねえッ！ 今まで、そうやってきたッ！ただ、それだけだッ！ 行くぞ、ガイッ！」

「はいッ！」

二人はその身に光を宿し、自身の宝具を発動する。

無論、それをゴルゴーンが無視する筈もない。彼女も全力で魔眼を開放し、再びダイナたちを物言わぬ石へ変えようとする。

「石となれええええッ！」

放たれる破滅の一撃。

だが、闇が光を容易く飲み込むように、光もまた、闇を切り裂く。

「ソルジエント光線ッ！」

「オーブスプリームカリバアアアッ!!!」

僅かな均衡。

ぶつかり合った闇と光はほんの僅かな時間を競り合い、光が闇を押し返した。

二つの光は石化光線を打ち破り、ゴルゴーンを呑み込む。

ゴルゴーンは断末魔の叫びを上げ、爆散するのだった。

二部 Lostbelt No. 1 永久凍土帝国
アナスタシア

第21節 IF 大地の赤き巨人

あなたは無いだろうか？

ぎりぎりまで頑張つて、どんな状況でも必死に足掻いて、しかし、どうにもならない時を、あなたは経験したことがあるだろうか？

もし有るのなら、その内の多数が願った事があるだろう。

そんなピンチを救ってくれる希望ヒューローに。



ロスベルト異聞帯の一つ、永久凍土帝国 アナスタシア。

その中心地である『ヤガ・モスクワ』ではある一つの戦いが繰り広げられていた。

方や象を思わせる姿をし、山一つを軽々と越える巨体を持った、この異聞帯の王、正史ではイヴァン雷帝と呼ばれていた存在。

目覚めたばかりの彼は怒りに震え、目に入った物すべてを破壊せんと言わんばかりに暴走していた。

対峙するは、かのゴーレムマスター『アヴィケブロン』の宝具、暴走状態にあるイヴァン雷帝に負けない巨体のゴーレム『ゴーレム・ケテルマルクト王冠：叡知の光』の肩に乗り、操る青年『藤丸 立香』とその仲間であるカルデア勢。そして、この異聞帯を任されているクリプター『カドック・ゼムルプス』とそのサーヴァントである『アナスタシア』。

戦いはラストスパート。

サーヴァント『アントニオ・サリエリ』の奏でる音色がイヴァン雷帝を弱らせ、戦況はこちらが有利だと、その場にいた誰もが思った。……しかし、現実是非常だった。

「ナメるなよ、貴様らああああッ！」

イヴァン雷帝の渾身の一撃が、ゴーレムの胴体を軽々と貫いた。牙が突き刺さり、崩壊していくゴーレム。その肩に乗っていた立香の体はいとも簡単に宙に放り出されたのだった。

『マスターッ！』

——マシユの呼ぶ声が聞こえる。

頭の中を駆け巡るのは今までの旅路の記憶。

『立夏くんッ！』

——ダ・ヴィンチちゃんの呼ぶ声が聞こえる。

それは走馬灯と呼ばれるものだろう。

——ホームズや所長、みんなが言う。『死ぬな』、と。

ああ、だがしかし、人生と言うものには、時にどうにもならないと
きが有るのだ。

アタランテ・オルタが駆ける。

——間に合わない。

アナスタシアがヴィイで受け止めようとする。

——間に合わない。

カドックが魔術で重力を操作しようとする。

——間に合わない。

「クソオオオオオオオオオオッ！」

立香の悔みの叫びが、吹雪の荒れ狂う大地に響き渡る。

——そのとき、不思議なことが起こった。

「——え？」

地面まであと一秒。

その瞬間、地面が抜けたのだ。半径二メートルの円形に開いた底の見えない穴に、本来なら地面に血肉の花を咲かせるはずだった立香は落ちていった。

——何が起こってるんだ……ッ!?

死を覚悟した立香は激しく困惑していた。

しかし、暫くして彼は更に混乱することになる。

何せ、本来なら加速する筈の落下速度がゆつくりと、だが確実に落ちていくのだ。

立香の体感時間で五分は落ちていただろうか。

落下速度がゼロになったとき、宙に浮く彼は辿り着いたその光景を目の当たりにする。

マグマのように赤く、しかし、湖畔のような静けさを持った泉。

鍾乳洞のように幻想的で、しかし、鍾乳洞とはまったく別の美しさ

を持った岩肌。

立香は理解した。

これはこの地球ほしが持つ美しさの一つなのだ。

立夏は思い知らされた。

これはこの地球が持つ力の一つなのだ。

彼が目の中の光景に見とれるなか、ふいにある声が聞こえてきた。

『藤丸 立香』と自分の名前を呼ぶ声が。

立香は声が聞こえた方向を、自分の後ろに体を向ける。

——そこに居たのは『光』だった。

優しくも猛々しく、力強い、この地球が持つ力を纏った、紅の光をその体に宿した巨人。

立香はその神々しさに圧倒された。そして、巨人に願った。

「頼む……身勝手なのは分かってるッ！ でも、お願いだッ！ 俺たちの世界を救ってくれッ！ 君ならそれが出来る力を持つてるんだろッ!？」

巨人は立香の願いに答えることはなかった。

しかし、そう返ってくるだろうと、立香はなんとなくだが分かっていた。

（こんなのは只の弱音だ……そんなことは分かっている……でも——）

彼は思い浮かべた。

最初は医師兼司令として通信機越しから、最後には自身の存在と引き換えに自分達を救ってくれた魔術王の顔を。

彼は思い浮かべた。

敵でありながら、最後は一人の存在として自分と戦った人王の顔

を。

彼は思い浮かべた。

いつも笑顔で自分達をサポートし、最後には己の命を犠牲にして逃がしてくれた大天才の顔を。

彼は思い浮かべた。

共に笑い、共に戦い、家族同然とも言える英霊たちの顔を。

彼は思い浮かべた。

いつも側に居てくれて、今も自分の為に盾を振るってくれた一人の少女の顔を。

彼は思い返した。

そんな彼らと共に歩んできた数々の旅路じかんを。

「――俺は、否定したくないんだッ！ 皆と一緒にいた今までをッ

！ 皆が残してくれたこれからをッ！

――諦めたくはないんだッ！」

彼の叫びが、心からの想いが響き渡る。

……だからこそ、と言うべきか。

彼の身に不思議なことが起こった。

彼の視界が巨人とは別の所から光をとらえ、その場所を見てみれば、彼の体を巨人から放たれる光と同じものが包み込んでいるのだ。

しかし、立香はすぐに否定した。

「これって……光に包まれているんじゃない……光が俺の中に……俺と一つになっていく……ッ！」

立香と一つになっていくその光は……この地球の赤き光は彼と共に上へ、今も激戦が続いているであろう地上に向かって舞い上がった。

地上。

そこで戦っていたマシユたちは激しく混乱していた。何せ、地面に落下中だった立香が突然、姿を消したのだから。

『ダメだッ！ 魔力反応も一切なしッ！ 彼を完全に見失ったッ！』

「野郎……まさか、転移魔術で逃げたとかじゃねえだろうな……ッ!」
カドツクが悪態をつくが、それをマシユが、本来なら彼が居なくなつて激しく動揺するであろうマシユが否定した。

「マスターは逃げませんッ！ いつだってそうでしたッ！ ゲーティアとの戦いの時もッ！ ティアマトとの戦いの時もッ！ どんなにピンチな時でも先輩は逃げなかつたッ！ だから、私はマスターを……先輩を——」

——そのときだった。

突然、通信機の向こう側からカルデアの職員の一部、ムニエルの慌てた声が聞こえてきたのだ。

『な、なんだこれッ!』

『ええいッ！ 今度はなんだねッ!』

『強力な魔力反応を感知ッ！ なんだよ、これッ!？ 神話クラスとか話になんねえぞッ!？』

——来るぞッ!』

その瞬間、まるでムニエルの言葉を合図にしたかのように、雪雲で薄暗く閉ざされた大地に、猛火のように紅く、太陽のように温かく、華々のように優しい光が舞い降りた。

その衝撃で地面を覆っていた雪が高く舞い上がり、その場にいた者たち全ての視線を釘付けにした。

雪煙が収まるに連れ、光が晴れていく。そして、光が完全に消えると、そこには光の中から生まれたとでも言うように、一人の巨人が立っていた。

紅蓮と白銀に染まった巨体。胸から背中に向かって走る金色の輪廓線が刻まれた黒いラインはVの字を思わせ、胸のクリスタルは青空を思わせる光を放っていた。

吹雪に閉ざされた世界に現れた巨人に多くの者が見とれるなか、巨人はマシユを一瞥し、力強く頷いてから顔をイヴァン雷帝に移す。

一方のマシユは巨人の視線を感じた瞬間、はつきりと理解した。

「先、輩……？」

一方、その頃。

突如現れた巨人を見ていたコヤンスカヤは苦虫を噛み潰したような、まるで厄介な者に出くわしたと言いたげな表情を浮かべていた。「まさか、本当に現れるとは……あの御方が言っていた事は本当だったのですね」

コヤンスカヤは自分が遣える人物が言っていた言葉を思いだし、その人物が言っていた巨人の名前を口にした。

——大地の赤き巨人 ウルトラマンガイア、と。

第21節IF 慈愛の戦士

真の強さとは何か？

もしそう聞かれたとき、あなたはどうか答えるだろうか。

力、絆、仲間……答えは人それぞれだろうが、その答えの中にこう答える者がいて欲しい。

——真の強さとは、『優しさ』であると。



皆は持っているだろうか？ 幼き日の記憶を……。

流星に幼少期の記憶となると物が限られてくるだろう。初恋や友達、いい思い出から悪い思い出まで、人によって様々だろう。

凡人類史最後のマスター、藤丸 立香にもそういった記憶がある。しかし、その話を聞くと、どうしても作り話にしか聞こえない。何故なら彼は幼少期に光る青い巨人に会った事があると言うのだ。無論、人類史において、そのような生命体は存在しない。彼の親や友達など、誰一人として彼の話を信じるものは居なかった。

だが、彼はそれでも良かった。信じてもらえなくても、彼が体験した事は事実だ。現に、彼は巨人から受け取った青い宝石を大事に持っていた。

時は流れ、立香が青年へと成長し、人類史を救ってから数年。地球

は異星より来た謎の存在によって白く染まった。同時に出来る、全く別の歴史を辿った七つの世界『異聞帯』ロストベルトが生まれた。

その内の一つ、Lostbelt No. 1 永久凍土帝国アナスタシア。

凡人類史を救うため、立香はクリプターの一人『カドック・ゼムルプス』の提案を呑み、そこで出会ったキャスターのサーヴァント『アヴィケブロン』が自分を犠牲にして作り出した『王冠：叡知の光』ゴレム・ケテルマルクトの肩に乗り、象を思わせる山のような巨体で暴れる異聞帯の王『イヴァン雷帝』に挑むのだが、勝利の女神は彼らに微笑まなかった。

倒れ伏す『王冠：叡知の光』とすぐ側に転がる立香。少し離れた所ではカドックや彼のサーヴァントである『アナスタシア・ニコラエヴナ・ロマノヴァ』、アヴィケブロン同様にこの異聞帯で出会ったサーヴァント『アタランテ』や『ビリー・ザ・キッド』、『ベオウルフ』達などの共に戦った者達が崩れた建物に横たわっていたり、膝をついたりしていた。

『先輩ッ！ 早く逃げてくださいッ！』

通信機からマシユの声が聞こえるが、落下したときに背中を打ったせいで上手く体を動かすことが出来ない。

(もう……駄目なのか……)

眼前には此方に歩み寄って来るイヴァン雷帝の姿。勝つ術なしと諦め、目を閉じる立香だったが……

——諦めるなッ！

「——ッ！」

脳裏に響く声。同時に、走馬灯のように思い返す過去の……かつて、巨人に会ったときの記憶に立香は目を開く。

「そうだ……諦めて、たまるか……ッ！ 諦めなければ、奇跡は起こる

……ッ！」

まだ痛む体を無理矢理動かし、何とか立ち上がる立香。その目には先程までの絶望は写っておらず、代わりに強い意思を感じさせた。

「あのとき……彼に誓ったんだッ！ 真の勇者になってみせるってッ！」

立香は首に下げている宝石を強く握りしめる。

そのときだった。握りしめていた手が強い熱を感じ、開いてみると宝石が強い光を放っていた。

光が立香の視界を塗りつぶし、あまりの眩しさに固く目を閉じる立香だったが、それでも光を感じる事が出来る。だがそれも一瞬の出来事で、光が弱まっていくのを感じた立香は目を開けるのだが、そこは先程までの白一色の雪世界ではなく、命を一切感じさせない荒廃した大地だった。

「ここは？ 俺、さっきまで——」

——立香……

「え——」

再び脳裏に響く声。見れば、少し離れた所に、かつて彼が出会った青い巨人が立っていた。

——久しいな、立香。

「君は……ッ!? まさか、君が俺をここに？」

——その通りだ。そして、ここは……私の記憶の中にある風景だ。

「君の、記憶……？」

——かつて、私はある惑星を奴らの脅威から守ろうとした。だが、私は守ることが出来ず、奴らの手によって作り替えられた星はこのような死の星となってしまったのだ。

「奴らって……まさか——ッ！」

——その通りだ、立香。だから、私は救いたいのだ。この地球を……この地球だけは、なんとしても。

巨人は立夏にそつと手を差ししのべ、彼に問いかける。

——立香、力を貸してくれないか？

巨人の問い掛けに、立香は迷うことなく答えた。勿論だ、と。

『……………ばい……………んばいッ！ 先輩ッ！』

「——ッ！」

通信機から聞こえるマシユの声に、立香は意識を現実に戻す。見れば、イヴァン雷帝が今にも此方を踏み潰そうと前脚を上げている所だった。

通信機から『逃げろ』と声が聞こえる。だが、立香は逃げない。

立香は決意を固め、宝石が姿を変えたアイテム『コスモブラック』を掲げ、声高らかに彼の……………巨人の名を叫ぶ。

「——コスモオスツ!!!」

次の瞬間、彼は光となって空を飛び、巨人となって大地に降り立った。

巨人の姿を見て、ヤガの者達や離れた場所で見守っていたカルデアのメンバー達は思わず見とれてしまう。それほどまでに巨人を染める蒼は大空のように眩しく月光のように優しいものだった。

その巨人の出現をまた別の場所から見ていた異星の使徒『コカンスカヤ』と『ラスプーチン』。

「追ってきましたか、あの巨人。無駄だと言うのを理解出来てないのですかね？」

「それは違うな、コカンスカヤ」

「と言いますと?」

「追ってきたのではない。帰って来たのだ」

——ウルトラマンコスモスは……。

幕間

タイタス幕間くお願いタイタス！く

力には、振るうべき時がある。

人には、戦うべき時がある。

そして、そのマッスルは誰かのためにある。



「——全て、あの宇宙人のせいだと思うの」

「あの、刑部姫さん？ 急にどうされたのですか？」

ノウム・カルデアの食堂。そこにある一席にマシユと刑部姫が向かい合って座っていた。その珍しい組み合わせに、食堂に来た者たちは何事かと好奇心で視線を向けてしまう。

本人たちはそんなことに気づかず、刑部姫はぐちぐちと語る。

「昔のまーちゃんってさ、もつとスマートだったじゃん。ノベルゲートかなら間違いなく『受け』側の人間だったじゃん」

「は、はあ…？（受けとはなんなのでしようか？）」

「そりゃね、いろんな所を渡り歩いて来たから多少の筋肉がつくのは仕方ないよ？ ていっても、前みたいな細マッチョなら何も問題なかったの。薄い本のネタにもなったし」

「そ、そうですか…今の先輩も、その…大変魅力的だと思いますが…／

／

「マシユちゃんにとってはね。でも私には違うの。だって「なに話してるの、おつきー？」ひよわあああッ!」

突然の声に刑部姫は驚き、マシユは声をかけてきた少年、今さっき話の話題となっていたまーちゃんこと、藤丸立香とその彼の肩に乗る半透明の小さな小人『ウルトラマンタイタスに返すのだった。』

「先輩、タイタスさん。トレーニングお疲れ様です」

「そうでもないよ。今日のメニューもいつも通りだったし。もう慣れたものさ」

『うむ。スクワット5000回もスムーズに出来るようになってきたな』

「いや、まーちゃん。普通の人は5000回もスクワット無理だからね。英霊でも片手で数えるくらいしか出来ないからね。なんでそんなになっちゃうの…」

「なんでつて…やつぱり、みんなを助けるためかな？ 少しでも鍛えて、みんなの負担にならないようにしたいしき。それにストレッチも意外と慣れたら苦じゃないよ。それに、一度駄目でも再度挑戦すればいいし。そう、再度挑戦すれば——」

「……？ まーちゃん、どうし「再度挑戦…」え？」
「再度、挑戦……再度……サイド……」

——はいッ！ サイドチェストオオオッ！

バチーンッ！、と刑部姫の額に、立香の筋肉の膨張によって弾けとんだ服の破片が直撃する。

「ナイスポーズです、先輩」

『うむ。見事な仕上がりが』

だが、彼女はそんな額の痛みに気にせず、叫んだ。

「なんなのッ!? その爽やかスマイルの下にある合成写真のようなゴリマツチョッ！ 私のまーちゃんを返してッ！ 細マツチョだったあの頃のまーちゃんに戻ってッ！」

「おつきーも鍛える？」

「嫌だからッ！ 姫はそんなマツチョになりたくないからッ！」

「まあまあ。そう言わずに」

『刑部姫くん。今から君もウルトラマツスルだッ！』

「先輩、私も同行しますね」

「やめてえええッ！ お姫様抱っこという嬉しい筈のシチュエーション

ンをトレーニング連行という絶望に変えないでえええッ!!」

だが、彼女の叫びは誰にも届かず、彼女は立香たちの手でトレーニングルームへと連れていかれた。

トレーニングルームには既に先客として『アシユヴァッターマン』と『クー・フリーリン』、そしてスカサハがいた。二人が倒れ、スカサハが涼しい顔で立っている所から相当な扱きを受けていたのだろう。

そんなスカサハがルームに入ってきた立香たちに気づく。

「おや、マスターか。こんなところまでどうした？」

「ちよつとトレーニングをね。そういうスカサハは……見れば分かるか。大丈夫、二人とも？」

「な、何とか……な……」

「いつも殺りすぎなんだよ……」

「まったく情けない。少しはマスターを見習ったらどうだ？ 聞けば、その馬鹿弟子の投げた槍を弾き返したそうではないか」

「違いますよ 俺じゃなくて、タイタスがやったんですよ」

「同じことだ。今のお前はその異星の戦士と一つになっているのだろう？ なら、そよつの力はお前の力でもある。

せつかくだ。ここで一つ、交わってみるか？」

スカサハが槍を向け、その意思を見せる。

立香はすぐさま刑部姫たちを離れさせ、刑部姫はトレーニングを逃れられた事を喜ばしく思っているが、ただ先伸ばしになったことを気づいていない。

「行くぞ、タイタスッ!!」

『うむッ!』

立香は自身の右腕に装着された手甲型のアイテム『タイガスパーク』のスライドする。

『カモン!』

「力の賢者ッ! タイタスッ!」

立香が変身に必要なキーホルダー型のアイテム『ウルトラマンタイタスキーホルダー』を前に掲げ、右手で握るとタイガスパークが反応。手甲のクリスタル奥では光が集まり、一人の戦士を形取る。

「バディイイツ！　ゴオオオツ!!」

【ウルトラマンタイタス！】

立香がスパークを掲げるとクリスタルから光が溢れ、その光は立香を包み、一人の戦士へと変身させた。

はち切れんばかりの、しかし洗礼された全身の筋肉を彩る黒と赤、そして銀のボディ。胸の中心と額にはU40の戦士であることを示す『スターシンボル』。

この戦士こそ『力の賢者』。またの名をウルトラマンタイタスである。

「——タアツ！」

「ナイスマスキュラーツ！　肩に恐竜戦車乗せてんのかツ！」

「——イイツ!!」

「ナイスバツクツ！　背中にベリアル宿ってるぜツ！」

「——タツスイツ!!!」

「胸のスターが輝いていますツ！」

「二仕上がってるよ(てます)ツ！　仕上がってるよ(てます)ツ！

ウルトラマツスルはいズトーンツ!!」

「ねえ。なんでみんなして筋肉を誉めてるの？　ねえ、なんでツ!？」

「ふむ。見事な筋肉だ。思わず見とれてしまったぞ」

「ありがとう。だが、このウルトラマツスルは鑑賞するために鍛えた訳ではない」

「分かっているとも。では見せてもらおう、その力をツ！　このスカサハにツ！」

「賢者の拳はツ！　全てを砕くツ!!」

次の瞬間、互いに向かって駆け出すタイタスとスカサハ。

力の賢者の本気の拳、影の女王の投擲した槍、二つがぶつかったとき、ノウム・カルデアが揺れたのはまた別のお話で…